
ハヤテの秘密

ゆう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハヤテの秘密

【Nコード】

N3986E

【作者名】

ゆう

【あらすじ】

三千院家の執事綾崎ハヤテには、だれにも知らない数々の秘密があった。それは・・・？

第1話（前書き）

ハヤテ「この小説は、ハヤテのごとく ファンフィクションです。」

第1話

僕の名前は、綾崎 ハヤテ三千院家の執事をやっている。

お嬢様（三千院 ナギ）は僕の事をなにも苦手などないと言っが、僕は秘密にしている弱点がある。

それは、Hな写真を見せられると顔を真っ赤にしてしまうのだ！
後、動きが鈍くなってしまうのだ。

まあ、まだあるが・・・説明は、これぐらいにして話しを始めよう
としよう。

僕は、いつものように執事の仕事をしていた。

執事の仕事は、とても大変であるが、僕は一生懸命、頑張っていた。

朝、僕は、お嬢様を起こしに行く。

トントン、

ドアをノックして入る。

いつものように電気を付け、お嬢様の体をゆらした。

「お嬢様、起きてください！朝食が冷めてしましますよ」

しばらくして、返事が返って来た

「眠いから、もう少し寝かせてくれ」

そういつて、また寝てしまう。

「お嬢様、起きて下さい早くしないと僕が作った朝食が・・・。」

言いかけるうちに、ナギは眠そうに起き上がった。

「ハヤテは、うるさいな・・・さつさと食べるぞ」

「はい!!」

僕は、喜んだ。

それは、お嬢様がいつもより、早く起きたからだ

そして、お嬢様は好きな物を先に食べる。

ちなみに今日の朝食は、鰯にご飯、ピーマンの肉づめだった。

いつもより少ないのは、ナギはあまり食べないからであった。
しかし、高級食材を使っている。

・・・さすがお金持ちだ

ナギは、鮭のご飯だけを食べて部屋に戻ろうとした時、僕は言った。

「ピーマン、残してしまうんですか?」

「ああ、では寝る。」

「学校の方は?」

「もちろん、いかんぞ」

ナギは、はつきりいつてさつさと、部屋に戻ってしまう。

「今日もハヤテ君、一人ですね」

マリアは、花壇の方の仕事が終わったらしく、キッチンにひよっこ

り出す。

「・・・じゃ僕、行ってきますね。」

鞆を持ち、屋敷の外に出た。

第1話（後書き）

初めて書くのですがどうでしたか？読み終わりましたら、ぜひ感想を書いてくださいね

第2話

僕は、朝早く学校に行くそして、誰よりも、早く着いた。

僕の教室に行くと、何か人影があつた。

それは、ピンク色の美髪で、僕がよく知っている相手だった。

その人は、僕に気付き、ニコリと笑う。

「ハヤテ君、早いね、おはよう。」

「おはようございます。」

思わず、顔が赤くなってしまい、下を見てしまう

相手の名前は、そう・・・桂 ヒナギクである。

白星学院の生徒会長で、頭がよく、そして弱点は高所恐怖症であつた。

ちなみにヒナギクの席はどこかというと、隣である。

「じゃあね、ハヤテ君！私、生徒会長だから」

そういつて、ヒナギクは教室から出ようとした時、僕は・・・

「僕にも手伝わせてください！」と言ってしまった。

その言葉にヒナギクは、こう思っていた。

えっ、ハヤテ君が・・・二人つきりになっちゃうじゃない。
気がつくとも今も二人きり・・・
そう思うと顔を真っ赤にしてしまう。

「別にいいわよ、これは私の仕事なんだから・・・」

私は、強気で言ってしまう
ハヤテは、その言葉にガクツと来た。
しかし、諦めずにこう言う。

「普段、ヒナギクさんにお世話になりっぱなしなので、そのお礼を
させてください！」

「あっ・・・分かったわよ」

僕は、ヒナギクさんのお手伝いをする事になった。

なぜ、本気で言ってしまったんだろう・・・。

だけど、ヒナギクさんに頼まれた仕事は、きっちりやらなければ
！！

「この書類にサインとハンコを押して欲しいの。出来るわよね？」
「もちろんですー！」

僕は、ヒナギクさんに褒めてもらえるように早くテキパキとやった。

僕は頼まれた事を完璧にやる。
最後のコピーも出来た。

「終了です！ヒナギクさん」

「ハヤテ君、助かったわありがとう・・・」

「いえいえ、突然です！」

ヒナギクさんから、休んでもいいわよと、言われ少し休む事にした。休んでいる間、僕の目が眠気が来たように重たくなったような感じがした。

ヒナギクは、それに気付き、大丈夫？と言う。

僕は、平気です。というかし、とても眠く、座ったまま寝てしまふ。

「よっぽど、眠たかったのね・・・」

ヒナギクは、布団をかけた。

第2話（後書き）

ハヤテ「すう」ヒナギク「私も眠たくなってきちゃった・・・」
眠り」二人とも寝てしまったのでここで終わりです（

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3986e/>

ハヤテの秘密

2010年10月10日16時08分発行